



# テレビドラマ脚本で用いられる終助詞について : 年代差・性差・表記差の分析

松下, 晶子

---

**(Citation)**

コーパスと文体論のインタフェース2018発表論文集:1-14

**(Issue Date)**

2019-03-01

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005628>



## テレビドラマ脚本で用いられる終助詞について

### —年代差・性差・表記差の分析—

松下 晶子(専修大学 大学院生)

arukumatsushita@gmail.com

#### An Analysis of Sentence Final Particles Used in TV Drama Scenarios

MATSHUSHITA Shoko (Senshu University, Graduate Student)

#### 概要

現在, 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム(NKAC)により, 過去のテレビドラマやラジオの脚本を収集, アーカイブする活動が行われている。本稿では, この活動の一環として, 脚本家故市川森一氏によるテレビドラマ脚本をテキストデータ化して構築した「市川森一脚本コーパス」を基に, 終助詞の年代差・性差・表記差について分析を行った。その結果, (1)4 つに区分された年代間の終助詞の割合の変化について見ると, 市川氏による終助詞の使用傾向が一部の年代間で異なっていたこと, (2)役割語として機能している「女性らしい」「男性らしい」終助詞がどの年代にも存在していること, (3)終助詞がひらがなで表記されるか, カタカナで表記されるかによって読み手に異なる影響を与えること, の3点を明らかにした。特に(2)(3)のような特徴からは, 脚本で使われる終助詞に特有の機能, つまり, それを読み, そして演じる役者への配慮と考えられる終助詞の働きを見て取ることができる。

#### キーワード

脚本コーパス, コーパス文体論, 終助詞, 脚本の文体

#### 1. はじめに

終助詞とは, 「文の終わりにあつて, 命令・疑問・反語・願望・禁止などの意味を決定し, または陳述の意味を強めたり, 感動を表したりする助詞」(『日本国語大辞典』第二版)と定義される助詞である。

日本語の記述的な文法研究の中では, 終助詞を聞き手と話し手の関係から分析するといった研究が数多く行われてきた。各終助詞の意味機能を記述したものから, 理論的枠組みによって終助詞の意味を記述するものまで, その分析の幅は広い。一方で, 理論的な分析や意味機能を踏まえて, どのような終助詞が, どのような人物によって, どのような場面で使われているのかという点を具体的に分析しているものは管見の限り少ない。文末で聞き手に対する伝達態度を担っている終助詞は, 話し手の性別や年齢, 性格などの特徴を強く反映する部分である。しかし現段階で, どのよ

うな人物がどのような終助詞を使用することでどのような伝達効果が生み出されているのか、終助詞の使用傾向は年代によって変わってきているのか、といった点を明らかにした研究はまだ多くないように思われる。

そこで本稿では、現代ドラマの脚本を用いて、年代差・発話者の性差・ひらがなとカタカナによる表記の違いという3点から、終助詞の分析を行う。

## 2. 問題の所在と本稿の目的

### 2.1. 先行研究

日本語の終助詞に関する従来の研究をまとめると、各終助詞の形式ごとにその意味機能を記述したものと、理論的枠組みによって終助詞の意味を記述したものとに分かれる。

まず、前者の記述的な研究についてまとめる。陳(1987)は、終助詞「よ」「ね」「さ」「わ」「ぞ」「ぜ」「な」に着目し、実際の使用例から、これらの終助詞が話し手と聞き手のあいだの通達的な面における一定のかかわりあいに関与すると述べている。また、林(1986)は、「な」「わ」「さ」「よ」「ね」の助詞を受ける語を6分類し、それらの承接関係や、イントネーションの在り方と意味との関わりについて述べている。

終助詞に関する研究の中で特に多いのは、「ね」や「よ」の意味や用法について書かれたものである。藤原(1991)は、「よ」の用法が、話し手が述べる事柄や聞き手に対してどのような立場であるかに関わっていることを述べている。さらに「よ」の表現性の種類は、それが用いられる文型の持つムード的な性格や構文的な条件、話し手との関係・立場の違いなどが複雑に絡むことによって決められると指摘している。また、中野(1991)は、「ね」「よ」が、平叙文・疑問文・命令文の上接部に下接する場合にどのようにして使われるかについて述べており、どの文タイプにおいても、それらが話し手の内から聞き手に対して、比較的強く差し出されて行く場合には「よ」、比較的弱くしか差し出されないであろう場合には「ね」が使われると指摘している。伊豆原(2001)は、「ね」と「よ」は話し手と聞き手が持っている情報の量によって使い分けられるものではないとし、共感的に話を進めることでよりよい伝達を目指す話し手の発話態度が「ね」の使用をもたらし、聞き手の注意を喚起し、状況に従って判断することを促すことで伝達を全うしようとする話し手の発話態度が「よ」の使用を支える、と主張している。さらに伊豆原(2003)は、「よ」「よね」「ね」の違いについて、発話によって聞き手に話し手と同一の認識を持たせるための手続きの違いである、と指摘している。

次に、後者の理論的な研究についてまとめる。金水(1993)は、終助詞研究全体について、ヨやネが話し手と聞き手の間での、ある種の情報・知識の調整に関わっているという論考が共通して多く見られると述べている。神尾(1990)は、「ね」の性質について、話し手の聞き手に対する〈協応的態度〉を表す標識であるとした。そのうえで、必須要素としての「ね」の用法を規定する条件として、話し手と聞き手が既獲得情報を持っていると話し手が想定している場合、話し手の発話は「ね」を伴わなければならないとした。さらに、その条件が満たされていない場合は、話し手が自己の発話により特に協応的態度を表現したい場合、話し手の発話は「ね」を伴うことが出来る、という条件を満たせば、任意要素として「ね」が発話に付加されることが出来るとした。さらに田窪・金水

(1996)は、「ね」が結びついている心的操作の本質は、単なる聞き手の知識の想定ではなく、知識の算定操作であると考えている。つまり、聞き手の知識の想定と見える用法は、単にその算定(利用可能な知識のうちから関与的なものを検索し、それと突き合わせることによって妥当性を計算すること)を聞き手に示して、確認を求めることから出てくる語用論的効果とみなせるということである。一方「よ」に関しては、知識が前もって自分の記憶にある場合及び現場から得られたものである場合は、相手に教えるという発話の力が語用論的に生じる、と述べている。加藤(2001)は、モダリティの観点や話者と聞き手の関係及び認識に関わるものとして分析されてきた、それまでの文末助詞の研究を踏まえ、「よ」と「ね」が談話構成機能を持つ談話標識であり、排他的知識管理を行うか行わないかという話者の意思を示すマーカである、と分析している。

## 2.2. 問題の所在

2.1で述べた通り、対話における話し手と聞き手、情報のあり方に着目して、終助詞の意味・機能を分析した研究は多くある。その一方で、終助詞を使用する話し手の特徴と終助詞の関係について調べたものは、管見の限りない。また、終助詞の使用傾向が年代によって変わってきているのかどうかについて調べた研究も、管見の限りない。文末で聞き手に対する伝達態度を担う終助詞は、話し手の性別や年齢、性格などの特徴を強く反映する部分であると思われるが、どのような人物がどのような終助詞を使用することでどのような伝達効果が生み出されているのか、終助詞の使用傾向は年代によって変わってきているのか、これらの点を明らかにした研究は見当たらない。

終助詞とその使用者の関係を分析するためには、発話者の特徴(性別、年齢)や発話場面などが明らかであり、その終助詞の使用による伝達効果を把握しやすい言語資料を分析することが望ましい。そこで本稿では、このような要請を満たすものとして、「テレビドラマ脚本」を題材として取り上げ、分析を行う。脚本を用いることのメリットとして、話し手(登場人物)の特徴が把握しやすいこと、場面分析によって終助詞の伝達効果を確認しやすいこと、などが挙げられる。脚本に近いものとして小説の会話部分も挙げられると考えられるが、より実際の発話に近い(話されるために書かれた言葉: *written to be spoken*)という点において、脚本の方が本稿の分析においては有効であると考えた。

さらに、終助詞の使用傾向が年代によって変わってきているかを分析することを目的として、一人の脚本家による一連の作品を年代ごとに分析する、という方法を取る。時代を通じて作品を生み出し続けてきた脚本家の一連の作品を経年的に分析することにより、そこに終助詞の使用傾向の変化があったかどうかを探ることにしたい。この点で、本研究は、ある脚本家の作品を通じた文体論的なアプローチをとることになる。

なお、脚本を対象として計量的な分析を行った数少ない例として、遠藤他(2004)が挙げられる。しかしながら、遠藤他(2004)の研究は戦前から戦後にかけてのラジオドラマの台本資料に焦点が当てられており、本稿で取り扱うような現代のテレビドラマの脚本はカバーされていない。また、年代による終助詞の使用傾向の変化という点にも触れられていない。

## 2.3. 本稿の目的

本稿の目的は、テレビドラマの脚本をコーパスとして用いて、脚本における終助詞の年代差、性

差, 表記差について分析を行うことである。まず 3 節では, 脚本のデータをコーパス化した手続きについて述べる。4 節では, 具体的な分析として, データを年代ごとに区分し, 年代ごとの使用傾向について分析した結果を示す。さらに女性登場人物と男性登場人物が使用する終助詞に着目する。そして, 表記の点において特徴的であるカタカナで表記された終助詞について例を挙げ, それらがどのような伝達効果を発揮しているかについて分析する。以上の点から, 脚本で使用される終助詞について分析を行い, 今後の脚本分析におけるひとつの足掛かりとしたい。

### 3. 使用データ

現在, 日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム(NKAC)により, 過去のテレビドラマやラジオの脚本を収集, アーカイブする活動が行われている。本稿では, NKAC による活動の一環として, 脚本家故市川森一氏のドラマ脚本をテキストデータ化して「市川森一脚本コーパス」を構築した。

今回使用した脚本のテキストは, 以下の市川森一氏による脚本集 4 点から取得した。

1. 『市川森一 センチメンタルドラマ集』(1983 年, 映人社) 14 作品収録
2. 『市川森一 メランコリックドラマ集』 (1986 年, 映人社) 10 作品収録
3. 『市川森一 ノスタルジックドラマ集』(1993 年, 映人社) 8 作品収録
4. 『市川森一 メメント・モリドラマ集』 (2012 年, 映人社) 8 作品収録

脚本中のセリフと書き部分を OCR で読み込み, 人手で校正したうえで, テキストファイルを作成し, さらに形態素解析辞書 UniDic(unidic-cwj-2.3.0)と, 形態素解析器 MeCab により形態素解析を行った。OCR とは, 光学的文字認識のことで, 手書きや印刷された文字をスキャナによって読み取り, デジタルの文字コードに変換する技術のことである。UniDic 及び MeCab は, 国立国語研究所による既存の大規模コーパス(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や『日本語話し言葉コーパス』)でも採用されている解析体系であり, 今後そういったコーパスのデータと比較をする際に有効であると考え, 本調査でも採用した。

次に, 4 冊に含まれる脚本(40 作品)を放送年の順番に並びかえ, 全体を 1970 年代(ただし 1 作品だけ 1969 年放送分を含む)・1980 年代・1990 年代・2000 年代の 4 つに区分した。10 年刻みで作品を区分することに強い根拠があるわけではないが, テレビドラマは時代の世相を反映するものであり, その大きな流れを把握するためには, ある程度の作品数を一つの年代で括ることが妥当だと判断した。それぞれの区分の作品数と総語数, 各群に含まれる作品は以下の通りである。

➤ 1970 年代:1969 年～1979 年放送(13 作品, 169,322 語)

「仮面の墓場」「祭りのあとに」「林で書いた詩」「冬の時刻表」「夢に吹く風」「みどりもふかき」「紙コップのコーヒー」「夢のながれ」「霧の日の童話」「幻のぶどう園」「バースデイ・カード」「ラスト・ダンス」「露玉の首飾り」

➤ 1980 年代:1980 年～1989 年放送(14 作品, 230,536 語)

「春のささやき」「チャップリン暗殺計画」「蝶の鼓」「いもうと」「夢の指環」「鬼の恋舟」「受胎の森」「星の旅人たち」「途中下車」「ただ一度の人生」「中国服の女」「面影橋・夢いちりん」「もどり橋」

「故郷」

- 1990年代:1990年～1998年放送(7作品, 131,717語)  
「夢で別れて」「サハリンの薔薇」「冬の魔術師」「私が愛したウルトラセブン」「ゴールデンボーイズ」  
「幽婚」「ここではない何処か」
- 2000年代:2000年～2011年放送(6作品, 99,709語)  
「乳房」「風の盆から」「銀河鉄道に乗って」「月の光」「旅する夫婦」「蝶々さん」

以上計40作品, 総語数631,284語(句読点などの記号類を除いた場合449,411語)の「市川森一脚本コーパス」を用い, 以下, 終助詞を対象として分析を行っていく。

#### 4. 終助詞の分析

##### 4.1 脚本に含まれる終助詞

終助詞の具体的な分析に入る。先ほども述べた通り, 本稿では終助詞の年代差, 性差, そして表記の差について見ていく。まず, 年代差について分析を行う。ここで言う年代差とは, 市川森一氏が当該の脚本を執筆した時期によって, 終助詞の分布に違いがあるかどうかを見ようとするものである。

表1 各年代の終助詞の合計数と総語数に対する終助詞の割合

年代	終助詞の合計数	割合
1970年代	4,014	2.37%
1980年代	4,451	1.93%
1990年代	2,545	1.93%
2000年代	1,706	1.71%

表1は, 各年代の終助詞の合計数と, 各年代の総語数(句読点や記号類含む, 以下同)に対して終助詞が占める割合をまとめたものである。割合を見ると年代を追うごとに, 終助詞が用いられている割合が減っていることがわかる。一元配置による分散分析を行ったところ, 有意差が認められたのは, 1970年代～1980年代で, P値は1%(有意水準は5%)となった。1970年代から1980年代にかけて, 脚本において終助詞の使用に対する市川氏の意識が変わったと考えられる。つまり, 作品数に大きな差がない1970年代から1980年代において終助詞の割合が減少しているということは, 市川氏があまり終助詞を使わなくなったと考えることが出来る。作品に目を通した限りでは, 1970年代から1980年代にかけての作品において作風が大幅に変化したという印象は受けなかったが, 数値の変動を見る限り, 終助詞の使用について変化があった可能性を指摘できる。

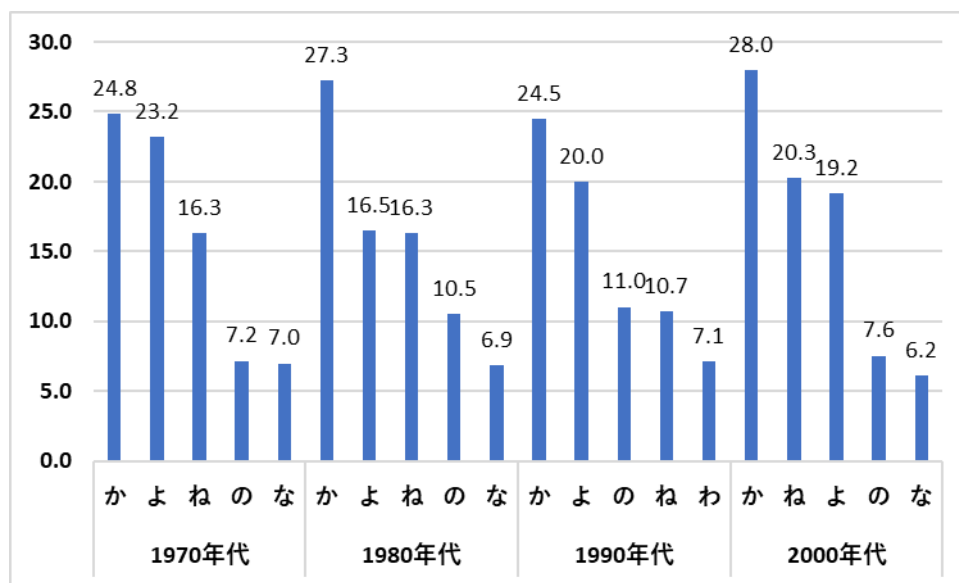


図1 各年代の総終助詞数に対する上位5つの終助詞の割合

図1は、各年代の上位5つの終助詞が総終助詞数に対して占める割合をグラフにしたものである。どの年代でも、上位5つの終助詞の種類は概ね「か」「よ」「ね」「の」「な」である。しかし、「か」をのぞき、その割合にはばらつきがあることが読み取れる。例えば「よ」は1980年代に減ったかと思えば1990年代に増えて2000年代もその割合を維持しているものの、1990年代まで2位だった順位は、2000年代になり「ね」に抜かされて3位になっている。一方その「ね」は、1990年代までは若干ながらその割合が減っていたが、2000年代には1970年代より高い割合で2位につけている。このように、代表的に用いられている終助詞の種類に年代差はあまりないものの、使用されている割合にはばらつきがあり、市川氏が意図的にそうしているのか無意識でそうしているのかについて、この段階では読み取れない。

次に、男女それぞれの登場人物が用いる終助詞について見ていく。なお、今回の調査では、各作品において総発話数が20以上かつ発話数が上位5人の中に入る登場人物にのみ絞って分析する。

表2 男女の総語数に対する男女それぞれの終助詞数が占める割合

年代	女性	男性
1970年代	4.1%	4.0%
1980年代	3.0%	2.8%
1990年代	3.4%	2.6%
2000年代	3.1%	3.1%

表2は、男女別に総語数を算出し(男性180,935語、女性106,087語)、それに対する男女そ

それぞれの終助詞が占める割合を示したものである。繰り返しのない二元配置で分散分析を行ったところ、男女間で有意差は認められなかったが、年代間で有意差は認められた。しかし、先述の通り、本稿における分析ではすべての男女登場人物を対象としていない。そのため、正確な有意差に関しては、今後すべてのデータをそろえた状態で行う必要があり、現時点ではここまでの分析でとどめておくこととする。

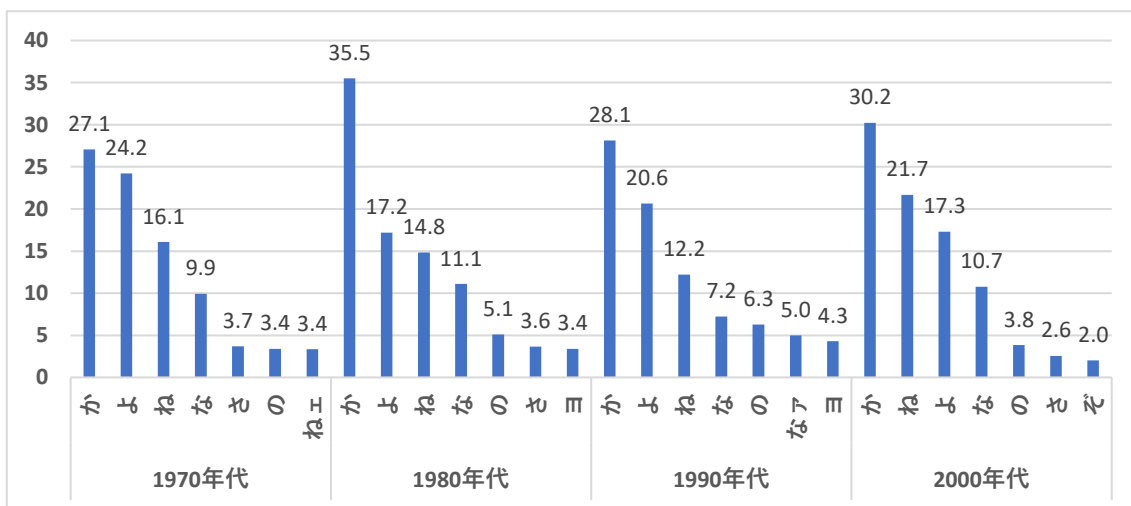


図2 各年代の男性登場人物の使用する終助詞上位7つ(100万語あたり)

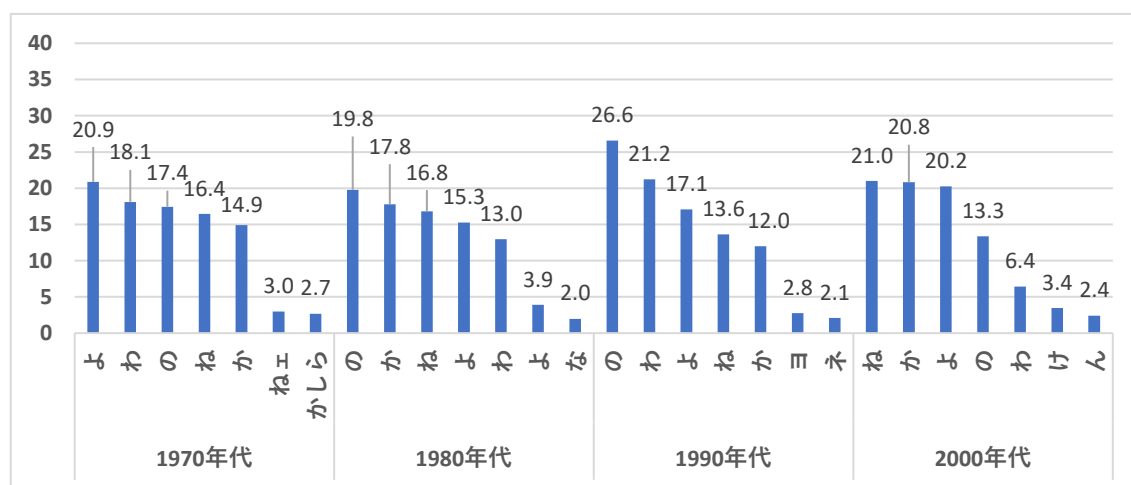


図3 各年代の女性登場人物の使用する終助詞上位7つ(100万語あたり)

図2と図3は、各年代の男性・女性登場人物が使用する終助詞7つについて、100万語あたりの頻度を表したグラフである。

女性登場人物で目立つのは、「わ」や「かしら」といった終助詞が上位に入っている点である。これらは、典型的な「女性らしさ」を表すために用いられていると考えられる。これは、ある特定の人物像を想起させる表現という点において、金水(2003)の言う「役割語」に近いと考



えられる。例を以下に示す。

- (1) 三佐子「いいえ、少しも。若々しくて素敵だと思いますわ」(1970年代『祭りのあとに』)
- (2) 千恵子「なにや、ものの怪にでもつかれたような顔をなさってましたわ」(1970年代『夢のながれ』)
- (3) めぐみ「お医者呼ぶわ」(2000年代『銀河鉄道に乗って』)
- (4) 貴子「ここいら、どの家も明かりが落ちているのは、みなさん、祭りにお出掛けなのかしら」(1970年代『露玉の首飾り』)
- (5) 小夜子「あら、停電かしら」(1980年代『チャップリン暗殺計画』)
- (6) ミチコ「今夜は、徹夜になるのかしら」(2000年代『銀河鉄道に乗って』)

一方で、男性登場人物の終助詞では、「さ」や「ぞ」といった終助詞が上位に入っている点が目に留まる。これも、「男性らしさ」を想起させる役割語としての働きがあると考えられる。さらに、終助詞「さ」に関しては、男性らしさというだけではなく、気取り屋な性格をもつ発話者である印象も与える。終助詞「さ」「ぞ」を含む例を以下に示す。

- (7) 犬尾「テニヲハが抜けてるんだ。ウエルニッケのいわゆる言語促進。クルーベリン学派の術語では、支離滅裂というヤツさ」(1970年代『仮面の墓場』)
- (8) 耕次「(昼酒をチビチビ)フン、本当のところをお話し申し上げりゃいいじゃねえかよ。俺と再婚したくねえ、本当の理由をさ」(1980年代『ただ一度の人生』)
- (9) はかま「俺たちの商売は笑わせりゃ天国さ」(1990年代『ゴールデンボーイズ』)
- (10) 肇「僕がいるところ？僕がいるのは亜季の夢の中さ」(2000年代『月の光』)
- (11) 犬尾「(入口に向かって、いきなり)坂井！待ってたぞ」(1970年代『仮面の墓場』)
- (12) 民夫「(親身に諭す調子)……私に、ついて来たって、この先、なんもいいことないぞ」(2000年代『旅する夫婦』)

さらに益岡・田窪(1992)が、普通体に終助詞「か」が付いた真偽疑問文は男性的な表現になると指摘している通り、脚本の中でも、「か」を用いる男性登場人物が、どの年代でも非常に多い。

- (13) 犬尾「稽古、見て行かないのか」(1979年代『仮面の墓場』)
- (14) 秋山「そっちこそ何だ。ヤケに暇そうじゃないか」(1980年代『もどり橋』)
- (15) 萩本「お前、笑いながら泣くやつあるか」(1990年代『ゴールデンボーイズ』)
- (16) 肇「(勘で)昔のまんまじゃないか」(2000年代『月の光』)

典型的な女性らしさ・男性らしさを示すこのような終助詞の使用は、役者が、演じる登場人物の性格や、場面におけるセリフの表現方法をくみ取りやすくするための工夫ではないかと考えられる。

## 4.2 カタカナ終助詞の分析

図 2・図 3 で目に留まったのが、カタカナで表記された終助詞である。

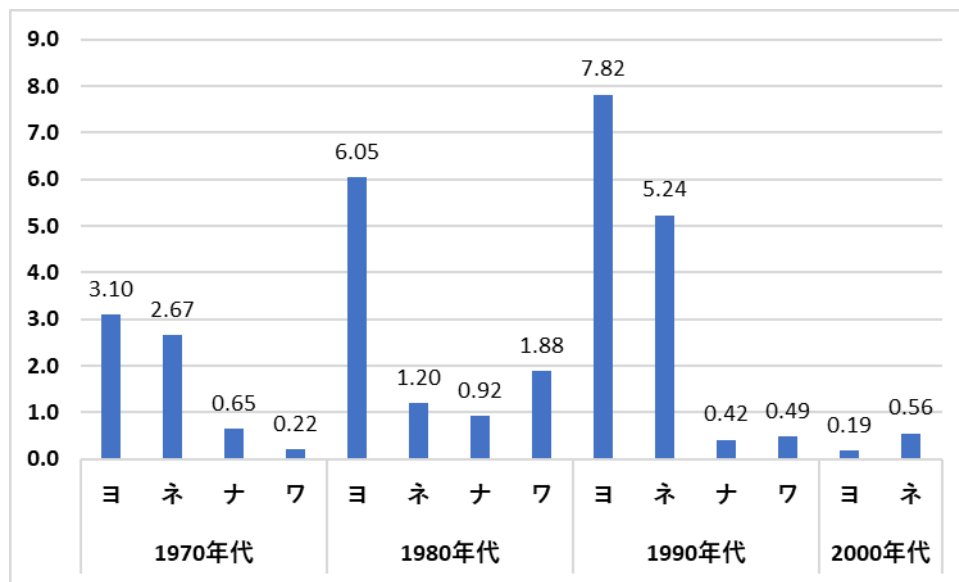


図 4 各年代においてカタカナで表記された終助詞(100 万語あたり)

図 4 は、出現率が高い終助詞「よ」「ね」「な」「わ」について、カタカナで表記されている頻度を 100 万語あたりで示したものである。

グラフからは、「ヨ」が 1990 年代にかけて徐々に上昇したものの、2000 年代の作品では頻度が顕著に落ち込んでいるという点が見て取れる。また、2000 年代では「ヨ」「ネ」が使用されているものの、その頻度は非常に少なく、1990 年代まで出ていた「ナ」「ワ」は登場しなくなってしまった。このような変遷が、市川森一氏自身の作風の変化によるものなのか、時代の影響によるものなのか、現時点での断定は難しいが、カタカナ終助詞を用いることに対する意識は 2000 年代に入り大きく変化したと考えられるだろう。

カタカナ終助詞に関して、その終助詞が使用されている「場面」についても触れておく。ひらがなではなくカタカナでわざわざ表記されているのだから、そこには何かしらの意図が含まれていると考えることは間違いではないだろう。そこで、その意図がどういったものなのかについて分析してみる。

## (17) 安武が受話器をとる。

安武「ハイ、刑事課！……(ニタリと)ハイ、少々お待ち下さい。デカ長！未来の奥さまからですヨ」

日下部たちにニヤニヤされて、高階戻ってくる。

(1970 年代『夢に吹く風』)

例文 17 は、安武という男性が、上司である高階の婚約者からの電話を受け取り、それを高階に引き継いでいる場面である。上司の婚約者から職場に電話がかかってきた、という部下にとって上司をからかうことができる絶好の機会に恵まれた場面であることが、カタカナ表記されていることで、より強調されている印象を受ける。実際に、例文 17 の終助詞「ヨ」の部分をつらなで表記してみると、からかいの印象は薄くなるように思われる。

(17) 安武が受話器をとる。

安武「ハイ、刑事課！……(ニタリと)ハイ、少々お待ち下さい。デカ長！未来の奥さまからですよ」

日下部たちにニヤニヤされて、高階戻ってくる。

「ニタリと」「ニヤニヤ」といった部分から、からかおうとしていることは読み取ることができるが、終助詞がカタカナで表記されている例文 17の方が、セリフ全体のからかいの印象をより強めている。さらに同作品内でつらなの「よ」で終助詞が表記されている例文を見てみよう。

(18) 電話をきる安武。

安武「白骨に付着していた土からも薬物らしいものは、なにも検出されなかったそうですよ」

日下部「これで死因の手掛かりもなしか……動機だけじゃ落とせそうもないし……」

(1970年代『夢に吹く風』)

例文 18 は、殺人事件の手掛かりに関する会話をしているシリアスなシーンである。これをカタカナで表記してみる。

(18') 電話をきる安武。

安武「白骨に付着していた土からも薬物らしいものはなにも検出されなかったそうですヨ」

日下部「これで死因の手掛かりもなしか……動機だけじゃ落とせそうもないし……」

カタカナで表記されることにより、シリアスなシーンにそぐわない印象が与えられ、つらなで表記される場合とカタカナで表記される場合に差があることがよりわかりやすい。

さらに他の例文を見てみよう。

(19) 平造「雷電岬？こっちは牧場を撮ってもらわなきゃ困るんだがなア」

一生「ハイ、ハイ、こっちはまた後日に。(遙に)そのままがいいから、早く乗って、さアさ、時間がないんでネ」

当てがはずれて不服面の平造を適当にあしらって、遙を強引にワゴン車に押し込んで、サッサと出発してしまう。

(1990年代『ここではない何処か』)

例文 18 は、撮影クルーの一員である一生が、平造という男性の娘、遙を撮影に参加させるため迎えに来た場面である。平造は自分が所有している牧場での撮影も含まれるつもりでいたのに、撮影クルーはそんなことは気にも留めず、自分たちの計画で撮影を実行しようとしている。

この例文 19 の場面でも、カタカナで表記された「ネ」によって、例文後半に出てくる「平造をあしらう」という場面がより想像しやすくなるのではないだろうか。最初の説明と話が違うことに困惑を隠せないでいる平造を適当にあしらって、なかったことにしようとしている一生の様子がより鮮明に伝わりやすい。例文 19 も、カタカナで表記された終助詞をひらがなで表記してみよう。

(19) 平造「雷電岬？こっちは牧場を撮ってもらわなきゃ困るんだがなァ」

一生「ハイ、ハイ、こっちはまた後日に。(遙に)そのままでもいいから、早く乗って、さアさ、時間がないんでね」

当てがはずれて不服面の平造を適当にあしらって、遙を強引にワゴン車に押し込んで、サッサと出発してしまう。

こちらの例文も、ひらがなで表記されることにより、カタカナで表記されていた場合に含んでいた「あしらい」のニュアンスが消えてしまったように感じないだろうか。適当にあしらうという印象はカタカナで表記された場合より薄まり、文章の中に埋もれてしまったような印象をうける。さらに同作品内でひらがなの「よ」で終助詞が表記されている例文を見てみよう。

(20) 平造「こんな牧場の景色のどこが気に入ったのか知らないが、何かしら夢を抱いてくれる……この景色の中に、異邦人とか、この空を飛べたら、なんて歌を思い描いてくれる……それだけでも嬉しいじゃないか……カメラマンの人が言ってたけど、あの佐々木一生って監督さん、昔は、テレビ局の有名なディレクターで、賞獲り男とか言われてた人らしいよ」  
遙「そんな人が、なんでカラオケなんか撮ってるの？」

(1990年代『ここではない何処か』)

例文 20 は、自分の牧場が、有名な元ディレクターの目に留まり、撮影地として使用される喜びを平造が語っているシーンである。例文中のひらがなで表記された終助詞「よ」を次のようにカタカナで表記してみよう。

(20) 平造「こんな牧場の景色のどこが気に入ったのか知らないが、何かしら夢を抱いてくれる……この景色の中に、異邦人とか、この空を飛べたら、なんて歌を思い描いてくれる……

それだけでも嬉しいじゃないか……カメラマンの人が言ってたけど、あの佐々木一生って監督さん、昔は、テレビ局の有名なディレクターで、賞獲り男とか言われてた人らしいヨ」  
遙「そんな人が、なんでカラオケなんか撮ってるの？」

カタカナで表記されたことにより、有名な元ディレクターを馬鹿にしている印象を受ける。実際は、しない自分の牧場が撮影地に選ばれ、しかも賞をたくさん獲った経験のある元ディレクターに撮影されるという喜びを語っているシーンであるのだが、カタカナで表記されることにより、受け取る印象は大きく変わってしまう。

以上のように、カタカナで終助詞が表記されることにより、そこに含まれた意図が前景化し、文字で表しうるニュアンスの可能性を大きく広げているように感じる。これは、さきほどのひらがなで表記された終助詞の分析でも述べたが、演じる役者たちが脚本を開いて自分の演じる人物の性格や、場面でのセリフの表現の仕方をくみ取りやすくする効果を持っていると考えられるだろう。

## 5. 考察

### 5.1 終助詞の分布と性差

終助詞全体の分析では、主に、年代別による出現傾向の変遷や、女性の登場人物・男性の登場人物が用いる終助詞という観点から傾向を見た。

年代ごとで見ると、終助詞の割合は減少していったが、高い割合で用いられている終助詞の種類について大きな差はなく、どの年代も同じような終助詞が用いられていることがわかった。一方で、性差について見ると、女性・男性ともに、「役割語」として終助詞が用いられているケースが目立った。それは、脚本家自身はその登場人物の性格をより際立たせるために意図的に使っていると考えられる。しかし、分析対象が脚本であるという観点からみると、それは脚本家自身の都合の中だけでおさまるものではなく、役者が演じることへの工夫という側面もあるのではないだろうか。

現段階では、個々の登場人物の性格に踏み込んだ分析まではできていないが、今後、個別の場面分析を進めることでより詳細な分析が可能になるだろう。さらに、終助詞「わ」に関して、女性らしい上昇調の「わ」ではなく、下降調の「わ」についても分析が必要になるだろう。ただし、これは実際に放送されたドラマの映像・音声を確認する必要がある。これも今後の課題としたい。

### 5.2 カタカナで表記された終助詞の効果

今回の分析ではカタカナで表記された終助詞「ヨ」「ネ」「ワ」「ナ」に焦点を当てて、年代による違いや、カタカナで表記される終助詞がもたらす効果について見た。

終助詞がカタカナで表記されることにより、それが用いられている場面で作者が表したいことがより明確に伝わりやすくなる効果があることがわかった。これは視覚的な情報が得にくい脚本という段階で、その場面が伝えたい細かいニュアンスを、表記の違いによって読み取りやすくする効果があると考えられる。

終助詞がカタカナで表記されるということは、単なる表記のゆれによるものではなく、意図的に何

かしらの効果を狙って区別されているということは間違いない。それがその時代に流行していた日本語を反映しているのか、役者が読み取りやすくするための工夫のひとつなのかについては、今後すべてのカタカナで表記された終助詞を分析し、具体的な場面分析を進めていく必要があるだろう。さらに既存の書き言葉コーパスの分析結果とも対照させていく必要もある。これらの点は、今後の課題とする。

## 6. まとめ

本稿では、「市川森一脚本コーパス」を作成し、そこに含まれる終助詞について、分析の一例を示した。特に終助詞の年代差や性差、表記の差といった点に注目して分析を行った。

終助詞全体の分析では、終助詞が用いられる割合が年代を追って減少していったことが確認され、各年代で用いられている割合が高い終助詞の種類に差はなかった。さらに、女性・男性登場人物という観点からも分析を行った。役割語として働く終助詞が、単純に役割語としてだけ働いているというわけではなく、演じる役者への工夫として機能している可能性も指摘した。さらに、カタカナで表記された終助詞にも注目し、カタカナで表記することで意図的に狙った効果を生み出している特徴も指摘した。

今後は、まず脚本コーパスの拡充が最優先の課題となる。今の時点では、使用可能なデータが市川森一氏の脚本のみであり、分析の対象とするデータ数としては不十分である。今後同時代に活躍した脚本家の作品もコーパス化を進めていく予定である。さらに今回は、終助詞という観点からの分析にとどまったが、陳(2012)が行った因子分析の 25 の調査項目などを参考にし、ほかの観点からの分析も行っていきたい。それぞれの脚本家が書いた作品群を定量的に比較し、最終的には「話されることを前提として書かれた書きことば」というユニークな脚本の持つ文体的特徴を明らかにしていきたいと考えている。

## 謝辞

本研究は、科研費基盤(B)「脚本クロニクル」サイト構築とその教育活用および国際発信」(JP17H02598, 研究代表者 藤田真文), 科研費基盤(B)「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」(JP16H03426, 研究代表者 丸山岳彦), 国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー 小磯花絵)によるものである。

## 引用文献

- 伊豆原英子(2001)「「ね」と「よ」再再考」『愛知学院大学教養部紀要』49(1), pp.35-49, 愛知学院大学教養教育研究会
- (2003)「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』51(2), pp.1-15, 愛知学院大学教養教育研究会
- 遠藤織枝・木村拓・桜井隆・鈴木智映子・早川治子・安田敏朗(2004)『戦時中の話しことば ラジ

オドラマ台本から』ひつじ書房

加藤重広(2001)「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』35, pp.31-48,

富山大学人文学部

神尾昭雄(1990)『情報のなわばり理論』大修館書店

金水敏(1993)「終助詞ヨ・ネ」『言語』22, pp.118-121, 大修館書店

——(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3), pp.59-74, 日本認

知学会

陳志文(2012)『現代日本語の計量文体論』くろしお出版

陳常好(1987)「終助詞一話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」『日本語学』6,

pp.93-109, 明治書院

中野伸彦(1991)「『ね』『よ』の働きについて」『山口大学教育学部研究論叢—人文科学・社会科学—』41, pp.1-17, 山口大学教育学部

学—』41, pp.1-17, 山口大学教育学部

林大(1986)「『なわさよね』のこと」『日本語学』5, pp.91-94, 明治書院

藤原真理(1991)「助詞『よ』の用法と機能」『東北大学文学部日本語学科論集』1, pp.120-13, 東

北大学文学部日本語学科

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版